李（イ）　熙馥（ヒボク）

学位の種類	博士（教育学）
学位記番号	教博　第　145　号
学位授与年月日	平成25年3月27日
学位授与の要件	学位規則第4条1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期3年の課程） 総合教育科学専攻
学位論文題目	自閉症スペクトラム障害児におけるナラティブに関する研究
論文審査委員	（主査） 教授　田中真理　　教授　川住隆一 教授　細川　徹

＜論文内容の要旨＞

本論文は、自閉症スペクトラム障害（Autism Spectrum Disorder、以下ASD）児のナラティブについて、自己理解や他者理解の観点からその特性と変容を明らかにしたものである。

ナラティブは、「ある出来事を時間的・因果的に結びつけ、評価を行うことを通して意味づけ、聞き手に伝える、話し言葉あるいは書き言葉による活動」と定義できる。この定義から、ナラティブには、ある出来事をナラティブとして構成する側面と、聞き手に伝える行為の側面が存在し、空想の出来事に関するFictional Narrative（以下、FN）と、自分の過去の出来事に関するPersonal Narrative（以下、PN）に分類され、話し言葉と書き言葉によって行われる活動であるといえる。

ナラティブは子どもの自己理解や、定型発達児において「心の理論」などの他者理解の発達と深い関連があることが明らかになっている（Fivush,1991; 岩田 ,2001等）。自閉症スペクトラム障害児は社会的相互作用における障害、いわゆる社会性の障害を有しており（DSM- V，APA，刊行予定）、他者との関係の中から自己をとらえ、他者の心の状態などを理解することは、ASD児においても重要な課題である。しかし、これまでのASD児を対象としたナラティブに関する研究は、主に言語能力との関連から検討されてきており、自己理解や他者理解の観点からのナラティブ研究はほとんどみられない。したがって、本研究ではASD児のナラティブに注目し、ASD児の自己理解や他者理解を中心とした社会性の観点から検討することを目的とした（第1部）。ASD児に

おけるナラティブに関する先行研究を概観すると、以下の4点の問題点が指摘できる。①主に構成の側面に関する検討が行われており、行為の側面には焦点付けられていないこと、②構成の側面における検討においても、その組織化に必要な要素に分類したうえでの分析視点が不十分であること、③主にFNをナラティブの対象としており、ASD児の自己理解との関連を明確にするためにはPNにも注目する必要があること、④ナラティブの変容や支援に関する研究が少なく、支援の実証的有効性が明らかとなっていないことである(第2章)。

これらの問題点を踏まえ、第2部では、ASD児のナラティブの構成の側面における特性について焦点を当て、①先行研究と同様の静止画課題を用いた話し言葉によるFNについて(第3章)、②動画課題を用いた話し言葉によるFNについて(第4章)、③話し言葉によるPNについて(第5章)、分析を行った。その結果、FNにおいては定型発達(以下、Typ)児に比べて、登場人物間の関係に注目することが少ないことが示された(第3章、第4章)。PNにおいては、自分の出来事を意味づける言及が少なく、自分と他者との関係に注目することが少ない、特に自分と他者との関係において、Typ児は自分と他者との相互性に注目した言及を多くしていたのに対し、ASD児は自分と他者との一方向的なかかわりに注目する言及が多くみられたことが示された(第5章)。これらの特性は、ASD児の自己理解や他者理解の特性との関連を示唆するものであった。

第3部では、行為の側面に焦点を当て、①ナラティブを行う際に聞き手の理解を促し、興味を引きつけるための言及や行動を加える行為に関して(第6章)、②ナラティブを行う際に聞き手の知識状態を理解し、それに応じて調整を行うのかに関して(第7章)、分析を行った。これらの行為は、他者とコミュニケーションなどを行う際に求められる他者理解に基づいた表出の特性を反映しており、ASD児はTyp児と比べてナラティブを行う際に聞き手をみる行動や内容に関連する身振りを多く用いていたことが示されたが(第6章)、ASD児はTyp児に比べてナラティブの調整を行うことは少ないことが示された(第7章)。これらの結果から、ASD児は聞き手に伝えようとする意識や意図は有しているが、Typ児の知識状態を理解した上で調整を行うことには難しさを有していることが明らかになった

第4部では、第2部と第3部で示された構成と行為の側面におけるASD児の特性がどのように変容するのかについて注目し、自己理解や他者理解との関連について分析を行った。①1名のASD児の6年間にわたる書き言葉によるPN記録を分析対象とした結果、自分の出来事を意味づける言及や、自分と他者との相互的なかかわりに注目する言及および、読み手を意識した言及がみられるようになった(第8章)。さらに、自己理解や他者理解の変容もともにみられ、ASD児のPNにおいてもナラティブと自己理解や他者理解は深く関連していることを明らかにした(第8章)。②また、2名のASD児を対象に、PNを対象としたナラティブの支援のために視覚刺激を用いた共同構成によって行った事例研究の結果、状況の時系列的な振り返り・出来事間の因果関係・言

動の主体の明確化といった構成の側面とともに、行為の側面についても支援の有効性が実証された(第9章)。これらの結果から、ASD児においても発達や支援を通したナラティブの変容過程が明確となった。

第5部では、今後の課題として、ASD児におけるナラティブと自己理解や他者理解との発達的な因果関係について明らかにしていくとともに、ASD児の自己理解や他者理解の特性に合わせたナラティブの支援に関する知見を蓄積し、ASD児の自己理解や他者理解を促す支援としてのナラティブの有効性についてさらに検証していくことが必要であることを論じた。

<論文審査の結果の要旨>

2012年文部科学省により実施された調査の結果、学習面および行動面での支援ニーズを要する児童生徒が全体の6.5%であることが示され、2007年より学校教育法に特別支援教育が位置づけられることによって求められてきた発達障害のある幼児児童生徒への教育支援は、さらなる今日的課題として注目されているところである。本研究は、発達障害のなかでも自閉症スペクトラム障害児の社会性の側面に焦点をあて、このような教育的課題に応えようとするものとして位置付けることができる。

論文審査の結果、本論文は次の点において評価できる。第一に、ナラティブの構成の側面に加え、先行研究では検討されてこなかった行為の側面に関する検討、およびフィクショナル・ナラティブに加えパーソナル・ナラティブを対象としたナラティブにも注目したことによって、自閉症スペクトラム障害児の自己理解や他者理解における特性との関連を明確にした点である。このことより自閉症スペクトラム障害児のナラティブの構成の側面においては、自分自身あるいは自分と他者の認知的・情動的状態を因果関係からとらえることや、出来事の事象間を時系列的・因果関係的に把握していく際に、言動の主体を明確にすることの重要性を指摘できる。また、ナラティブの行為の側面においては、自閉症スペクトラム障害児では他者の知識状態を理解した上で調整を行うことに困難さを有しているという詳細な様相が明らかになったことは、自閉症スペクトラム障害児の社会性支援の新たな観点を提供するものであると評価できる。第二に、ナラティブの構成と行為の側面における自閉症スペクトラム障害児の特性がどのように変容するのかについて介入研究を行い、自己理解や他者理解との関連について、その変容プロセスと支援の実証的有効性を縦断的研究より明確にしたことは、学校教育現場等での今後の幅広い支援方法の開発へと発展が期待できるという点で評価できる。

以上のような本論文の意義が指摘できる一方で、ナラティブと言語能力との関連の有無に関す

るデータ分析と考察が不十分であること、自閉症スペクトラム障害児の自己・他者理解との関連における独自性をより明確にするためには、自閉症スペクトラム障害児と定型発達児との比較にとどまらず、自閉症スペクトラム障害児におけるフィクショナル・ナラティブとパーソナル・ナラティブとの直接的な比較検討をすることが求められること、および、人間関係に関する自閉症スペクトラム障害児のナラティブを検討し、その社会性の特性を把握するためには、実験で用いるナラティブの刺激素材をより現実世界に近づけるための方法論上の工夫を重ねることが課題として残された。

以上のような問題点が指摘できるが、本論文は自己理解や他者理解を中心とした社会性の観点から自閉症スペクトラム障害児のナラティブの特性を解明することに寄与し、発達障害研究かつ教育実践にも資するものであると評価できる。

よって本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。